

顧みすれば七十年——魯迅のことも

北岡正子

今年は、日本が日中戦争、太平洋戦争に負けて七十年、いわゆる戦後七十年の年になる。私は来年で齢八十。中等・高等教育を敗戦後の新しい体制の中で受けた。また、研究対象を中国に選んだため、この間の日本・中国・台湾の政治や外交の転変から無縁ではなかった。ここでは、この所与の条件の中で経験したことを、いささかの私感を交えて振り返ってみようと思う。

日本の敗戦によって、私の前にはこれまで想像できなかった新しい路が拓けた。

一九四七年、日本国憲法が施行された。新しい憲法には、男女平等、教育の機会均等が謳われ、女性も、天下晴れて高等教育を受けることができるようになったからである。同年には、教育基本法、学校教育法、一九四九年には、

国立学校設置法が公布されて新制大学が設立された。日本の教育体制は、六・三・三・四制に改まった。

私は、その五年後、一九五四年、新制大学の第六期生としてお茶の水女子大学に入った。入学したのは文学科最少の定員五名という中国文学専修。当時は、まだ、大半の大学には教養科目に中国語はなく、さらに、中国文学科はあっても現代文学の講座はあまりなかった。私は中国語を専修の必須科目として学んだ。中国語の授業は、教科書も辞書も不備、教師の数も少なく、授業方法も試行錯誤、発音はもっぱら教師の口移し、文法事項の説明はほとんどないか、あっても多分に経験的なものであった。教師の発音の良し悪しが学生の発音の良し悪しに直結し、文章は繰り返し暗記することを要求され、まるで現代版素読教育のよ

うであった。当然、英語やドイツ語などの教育とはすべての面で雲泥の差があった。

一九四九年一〇月、中華人民共和国が成立し、国共内戦に敗れた蔣介石が台湾に逃れ、台北に中華民国政府を置いた。一九五〇年、対日平和条約と日米安全保障条約が発効、同時に台湾の国民政府との間で日華平和条約が結ばれた。日本はいわゆる「二つの中国」の内、台湾の国民政府を選んだのである。一方、社会主義体制をとった中華人民共和国は「中共」（赤い中国）と呼ばれ冷眼視された。二十年後の一九七二年、日中の国交が樹立するが、同時に国民政府統治の台湾との国交は断絶され、日華平和条約は存続の意義を失った。私が大学と大学院で中国文学を学んだのは、中華人民共和国とは国交のなかった時期である。いうなれば、自分が選択した学びの対象の故に、政治的逆風の中にいることを意識するようになったのである。

当時、中国語教育が依然として戦時中の「軍事的、商業的」な「支那語」修得の枠から抜けきれず、「急就篇」などを教科書としていたのには、戦前の対中国意識をそのままに外交が途絶えていたことも、要因をなしていたと思う。中国語や中国現代文学が社会的に市民権を認められるのはずっとずっと後のことで、当時は、下宿の主人に「若い身空で『支那語』ですか」と、不審げに言われたものがある。

かといって、われわれは、世の風潮に靡くようなことはなかった。このような状況はどの大学にもあり、学生の間には、科学的、学術的な「中国語」教育を切望する声が澎湃としていた。私が大学に入った時には、東京都内の大学で中国語を学ぶ学生が連携して「中国語を学ぶ学生の教室会議」（通称「教室会議」）を組織していた。毎月、回持ちで都内の大学で開かれていた先生方の「中国語学研究会」（「日本中国語学会」の前身）の月例会に傍聴に出かけ、その後、学生達で勉強会を開いたり授業内容についての情報交換などをした。こうしたことを疎ましく思われる先生もあつたが、新しい中国語教育を身を以て実践されていた倉石武四郎先生、実藤恵秀先生など、学生の意図を理解し心から応援して下さる先生も少なくはなかった。都立大学の竹内好先生は、中国語の授業を参観させて頂きたいという、思えば不躰なわれわれの願いを、快く聞き入れて下さった。あの柿の木坂のレトロな（？）教室での授業風景を、今もありありと思い出す。先生方の応援や学生同士の交流の中で、中国の新文学の知識を増やし、他大学の合宿などにも参加して実地にテキストを読んだりもした。在野では在野なりの学習方法を見いだしたのである。

大学では、発音と簡単な会話の練習を一通り終えた頃、魯迅の短編小説「孔乙己」一篇だけを収めた小冊子を、初めてテキストとして使った。小冊子だったので適当なテキ

ストとして選ばれたらしい。これを強引に暗記することになったのだから、初級も終了していない学生には難しく苦役に等しかった。二年生になると、テキストに選ばれたのは『呐喊』であつた。赤い表紙のこの本は、記念にとつてあるが、奥付には、人民文学出版社、一九五二年一月北京重排第一版、一九五四年一月北京第四次印刷とある。戦後、本屋の棚で見ることができたのは、中国現代文学では魯迅の作品が最初だったと思う。学生でも買うことができた。これが、魯迅との最初の出会いである。

その頃私は、やはり「教室会議」で知り合つた仲間に誘われて、学外の魯迅研究会に参加するようになった。会員は、大学の学生や社会人など、ほとんどが二十代の青年であつた。週一回集まつて魯迅の作品を原文で会読した。魯迅の中国語表現を納得できるまで確かめ合い、作品からどんなメッセージが読み取れるかについて意見をかわし、理解を共有しながら一篇一篇読み進んだ。会読の記録は、ガリ版刷りの薄い雑誌『魯迅研究』に載せた。ささやかな雑誌であつたが、全国に読者がいた。研究会は、困難な時代を生きた魯迅の精神に学び、戦後の日本社会での自分の生き方を考えようという気風に漲つていた。単なる知識を修得するための勉強会ではなかつた。当時、私たちは、中華人民共和国を「人民中国」の青春になぞらえ、そこに自分の青春を重ね、魯迅を読むことで未来への途を踏み出す精

神と力を身につけようとしていたのである。

魯迅研では、社会的問題に態度を表明することもあつた。一九六〇年の日米安全保障条約改定反対運動が起きた時には、再軍備に反対し、日中の平和を願つてこれに参加した。われわれは、いつもは魯迅の言葉を断章取義的に使うことを戒めていた。だがしかし、六月一日、反対運動の最中、国会を取り巻くデモで樺美智子さんが犠牲になった時、一度だけ、魯迅先生も許してくれるだろうといつて、「墨で書いた虚言は、血で書いた事実を覆いつくすことはできない」（無花的薔薇之二）と、「血」を赤字で書いたブラカードをかついで、みんなで追悼デモに出かけた。この時は、国交のない中国から弔電が届けられたのを憶えている。

魯迅研は約十年続き三十数冊の雑誌を出して終わったが、魯迅研で、多くの尊敬すべき先輩、友人と出会い、問題意識を共有し得たことは、その後の私の無形の支えとなった。何か問題にぶつかつた時、知らず知らずのうちに私は、魯迅ならこんな時にはどうするだろうと自問し、魯迅研でみんな議論し考え合つたことを思い浮かべ、自分を律する糧とするようになっていた。困難に出会つて気が弱くなりそうな時、魯迅に結ばれた仲間の友情に、私は幾度も励まされ、今日まで歩んできた。その中には、すでに仙界に旅立たれた丸山昇さんや伊藤虎丸さんもおられた。

大学院課程は東京大学で学び、「日本留学時代の鲁迅」をテーマにして修士論文を書いた。鲁迅が仙台医専を退学してまで始めた「文芸運動」とは何なのかを知りたかったことに加えて、鲁迅が「文芸運動」に着手したのが、大学のある本郷の地であったこと、日本にはまだこの時期の関連史料が残されていたことなどが動機であった。作家になる以前の日本における鲁迅については、調査もまだ手つかずの状態、果たしてどんな結果になるのか不安であった。その時たまたま、東京大学図書館で濱田佳澄『シェレー』という本に出会った。どうもその表現や内容が、文芸運動の核心的意義が読み取れる「摩羅詩力説」のシェリーの部分によく似ているなと思った。鲁迅の原文に照らし、論文の一部に書いた。だが、それだけでは「摩羅詩力説」全体を理解するには遠かった。

以来私は、「摩羅詩力説」と縁が切れなくなってしまう。関西に移り住んでから参加した中国文芸研究会の雑誌『野草』に、「摩羅詩力説材源考ノート」として、その後の材源の調査、検討の結果を、休載期間を挟みながら二四回連載した。この時も、会員、非会員の多くのかたがたの叱咤と批評と激励を受けた。材源の検討による作品解釈は、大学院で比較文学の授業で学んだ方法である。長い連載が可能であったのは、何よりも四十年以上続いている中国文

芸研究会と今年三月で九五号を数えた『野草』のおかげである。文芸研は、現在も私には大切な研究会である。連載以来、決して順調とはいえぬ路をのろりと歩み、この度、旧稿を大幅に改稿して『鲁迅文学の淵源を探る

「摩羅詩力説」材源考』(汲古書院、二〇一五年)として公開することができた。調査検討の一応の結果に辿り着いてみると、「摩羅詩力説」には、人間精神の向上(人間変革)に民族救亡の方途を求め、変革された「人」の実現を切望した鲁迅の痛切な思いがこめられていることが、よく納得できた。鲁迅は私に、詩(言葉)が如何にして人間変革の力を持つのかを十分に教えてくれた。またさらに、ここに作家鲁迅の誕生の鍵が隠されていることを知り、今ようやく、辛亥革命の後書き始めた鲁迅の作品を理解する出発点に立つことができた、と考えている。鲁迅から次の課題を与えられたわけだが、私はここに至るまでに年月を費やし過ぎた。暮れなずむ路をこれからどこまで進めるだろうか。

私が台湾に目を向けるようになったのは、日台の国交が断たれてからである。特に、戒厳令解除後、次第に台湾のことが分かるようになった。私の蒙を啓してくれたのは、台湾からやってきた留学生達であった。留学生達との会話の中で、また、提出されたレポートや論文を読んで、私は

しばしば、台湾の現在に至る歴史を振り返り自らの在り方を確かめようとする彼らの熱い心を感じた。日本統治下の、戦後初期の、続いて戒厳令下の、台湾の多くの作家や知識人や市民が受けた苦難について、知るほどに私は自分の不明を愧じた。

学んだことは沢山あるが、魯迅に関して、その中でぜひ書いておかねばならないことがある。

一つは、テキストとしての許壽裳『我所認識的魯迅』についてである。

日本に、魯迅の作品集や友人家族が書いた魯迅に関する書物が入って来るようになったのは、一九五〇年代中頃である。魯迅が東京で寝食を共にし文芸運動を始めた弟の周作人や親友の許壽裳が書いたものは、伝記的にも貴重なもので、当時も今も、魯迅研究の必読文献である。周遐壽『魯迅的故家』『魯迅小説裏の人物』、許壽裳『亡友魯迅印象記』『我所認識的魯迅』などである。われわれはそれを繰り返し読んだ。その内、許壽裳の二冊は北京の人民文学出版社から刊行されたものであった。前者の『亡友魯迅印象記』は、許壽裳がその死の数カ月前上海の峨嵋出版社で刊行したものの再版である。だが、後者の『我所認識的魯迅』の初版は一九五二年であるから、著者の生前には存在しなかった本である。

著者である許壽裳は、日本敗戦後、一九四六年六月、旧

友の台湾省行政長官公署長官陳儀の招きを受け台湾省編訳館館長として台湾に赴き、戦後台湾の文化政策に携わった。翌一九四七年には、二・二八事件、台湾省行政長官公署の廃止、陳儀の失脚、編訳館の廃止と続き、同年七月、許壽裳は台湾大学に招聘されて中国文学系の教授となった。だが、その半年後の一九四八年二月一八日深夜、大学官舎で惨殺され六五年の生涯を閉じた。

許壽裳は、台湾に住んだ二年足らずの期間に、魯迅についてそれ以前の十年を上回る文章を書いた。彼は生前の一九四七年六月、台湾赴任後に書いた文章とそれ以前に書いた文章を選び、『魯迅的思想與生活』の表題で台湾文化協進会より出版した。

前述の『我所認識的魯迅』は、許壽裳没後に初版が発行されてから、一九五三年、一九七八年と増補し改版している。許壽裳が生前台湾で出版した『魯迅的思想與生活』は、最終的には一九七八年版に至って、その全冊の内容が『我所認識的魯迅』に収録された。その分量は全頁数の約半分を占める。現在でも『魯迅的思想與生活』は容易には見るのできない書物であるから、全冊の内容が収録されている『我所認識的魯迅』は、大変便利な本といえるだろう。

ところが、『魯迅的思想與生活』原載の文章を含む『我所認識的魯迅』所収のかなりの文章には、初出誌（紙）に

著された許壽裳の文章とつき合わせてみると、あちこちに異同があるのだ。私が、著者が編集に携わるはずのない文集の文章に改変がある、という珍現象に気づいたのは、一九九〇年代になってからである。かつてわれわれが読んだものは、許壽裳が書いた表現そのままの文章ではなく、しかも魯迅理解にもかかわるような削除や改変が少なからずあるものだったことが分かり、いささか衝撃を受けた。そこで、初出と改変の箇所を対照した一覧表を作り私見を添えて一文を草した（『我所認識的魯迅』に異義あり）『関西大学 中国文学会紀要』第十七号、一九九六年、参照）。

これが可能になったのは、『許壽裳日記 自一九四〇年八月一日至一九四八年二月一八日』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会発行、一九九三年）の編集に関わっていた時、共編者である黄英哲氏と解説を共同執筆する過程で、『魯迅的思想與生活』を閲覧することができ、また、氏が解説に書き入れた「許壽裳 魯迅關係著作一覧表（稿）」や巻末に付した「許壽裳台灣時期年譜簡編」に示唆を受けたからなのである。

もう一つは、戦後初期台湾における魯迅思想の受容に關することである。

私は、黄英哲著『台湾文化再構築 1945～1947の光と影 魯迅思想受容の行方』（創土社、一九九九年）によって、戦

後初期の台湾で書いた許壽裳の魯迅に関する文章は、日本の桎梏を解かれた台湾社会に魯迅の思想を広め、一種の「五四新文化運動」を起こそうという文脈の中で書かれたものであることを知った。黄氏は「臺灣文化の再構築」を図ろうとしたものであると述べている。また、台湾の知識人達が魯迅の作品を読む中で政治や社会に対する批判の目を養ったことも知った。

これらの許壽裳の文章は、端的に言えば、許壽裳が魯迅思想を以て社会改革を試みようとしたものであり、また、魯迅の思想は、台湾の知識人達に現実変革の糸口を示すものであったことを教えられたのである。

かつて、われわれが魯迅理解の第一の資料として読んだ許壽裳の『我所認識的魯迅』には、テキストとして看過できない問題が潜んでいること、また、現在これに収録されている許壽裳の文章は、社会改革の意図を以て書かれたことを念頭において、われわれはもう一度この書を読み直してみなければならぬだろう、と思う。

台湾から来日した若い学徒によって、私は、知らなかった歴史の中から、魯迅理解の新たな視野をひらかれたのである。

ここで、その後、魯迅に親炙した者達には苛酷な運命が待っていたことに關して触れておきたいと思う。許壽裳は

非業の最期を遂げ、魯迅を愛読した者も含む台湾の市民、知識人は筆舌に尽くし難い苦難に見舞われた。これを見れば、魯迅の思想が為政者の忌諱に触れたであろうことが想像できる。これは、魯迅思想が台湾社会に強烈に作用を及ぼした結果の表れである、と私は思う。

私は、許壽裳の試みは、世界で初めての、ただ一度の、魯迅思想による社会変革の壮大な実験であり、その結果、魯迅思想が圧制者に対する対抗思想たりうることを、見事に証明し得たものだ、と思っっている。そして、犠牲となった人々は、魯迅の命がけの読者であった、と思うと、彼らの上に、若き日の魯迅がその実現を期待して止まなかった「一人」の姿が彷彿と重なつて見えるような気がするのである。

それにしても、魯迅思想の実践の何と恐るべく、何と哀しい結末であることか。

最後に、身近な感想を述べて終わりたい。

三十数年在職した大学では、毎年、学生達と魯迅の作品を読んだ。「呐喊」「彷徨」「野草」「故事新編」「朝花夕拾」はほとんど、雑文もずいぶん読んだ。魯迅をテーマにして卒業論文を書いた学生は、毎年二、三名はいた。修士論文、博士論文を書き学位を取った学生もいる。大学で教えることによって私の魯迅理解は深まった。それを学生と分かちあった喜びもあった。また、彼らの思いがけぬ見方に眼

を開かれたこともあった。先年、ある卒業生が年賀状に、この頃、通勤電車の中で魯迅を読んでいます、と書いてきた。思えば魯迅をテーマにした彼の卒論には心に響くものがあつた。高校生の息子のいる年になつても彼のなかには魯迅が生きている、彼は単なる読者ではないだろうと思ひ、彼は知識だけを学んだのではないと思つた。教場で魯迅を講読し、論文指導をしながら、痛感したのは、自分が理解していないものは教えることができないという、極めて当たり前のことである。

私は、幸運にも大学に職を得、安定した研究と教育の場が与えられた。受けた恩恵は多大であつた。私は希望を棄てずに自らの路を進むことができた。

だが顧みれば、同世代の女性達には、高等教育を受けても希望通り大学や研究機関に職を得ることが叶わなかった者は、数知れない。高校や大学に進学することさえ断念せざるをえなかった女性も、さらに多い。新制中学第三期生として共に机を並べ共に高校に合格しながら、ついに入学しなかった友人を思い出す。兄弟の多かった彼女は、兄と二人で働きながら、次に続く弟を進学させる道を自ら選んだ。戦争は終わり、新しい憲法で保証された教育の機会均等も、なかなか実体は伴わなかった。社会全般が疲弊し、厳しい経済状況が続く中で、中等教育、ましてや高等教育を受けるには、個人の努力の範囲を超えることがあまりに

も多かった時代である。

私はこの頃、ふと、中学を卒業する時、折口信夫に学んだという校長が、女生徒達に餞に下さった歌を想い出す。

今日よりは おのおのみにたどりゆく

乙女のみちに 添うひ花咲け

戦後の七十年の歲月は誰の上にも平等に流れ、同輩は等しく年老いた。あの時の乙女達は、それぞれの人生をどう歩んだのであろうか。どう花を咲かせたのであろうか。

私は、自分個人の偶然の幸運を手放して喜ぶことはできないと思っている。